

DEI 委員会

第9回 DEI フォーラム 開催報告

1. 開催概要

- ・日時：2026年5月31日（日）14:00～16:30
- ・方法：オンライン形式
- ・主催：公益社団法人 日本技術士会 DEI 委員会
- ・後援：男女共同参画学協会連絡会
- ・参加者：57名（講師1名、DEI 委員会委員含む56名）
- ・プログラム：
 - 14:00 開会挨拶（神田副会長・飯島委員長）
 - 14:10 講演「マイノリティ基点イノベーションによるインクルーシブインフラの構築へ」
（九州大学 芸術工学研究院 未来共生デザイン部門 准教授 羽野 暁 氏）
 - 14:55 質疑応答
 - 15:10 休憩
 - 15:20 グループディスカッション
（参加者全員：4～5人のグループに分かれてディスカッション）
 - 16:00 グループ発表（全体共有）、講師コメント
 - 16:25 記念撮影、閉会挨拶（池田理事・副委員長）
- ・司会進行：長委員

2. 内容

(1)開会挨拶 公益社団法人 日本技術士会 副会長 神田 淳

第9回 DEI フォーラムの開催に際し、DEI 委員会および男女共同参画連絡会のこれまでの尽力に敬意を表す。また、多くの皆様にご参加いただきお礼申し上げる。

海外と比較して日本のインフラ整備は進んでいる一方で、点字ブロック上への荷物の放置など、運用面やソフト面にはなお課題がある。さらに、健常者の視点で整備されたインフラが、障害のある方にとって真に適切なものとなっているかを考える必要性に触れ、本フォーラムを通じて、インクルーシブインフラやDEIについて学びを深める機会になるものと期待する。



神田淳 副会長

(2)趣旨説明 DEI 委員会 委員長 飯島 玲子

ご参加の皆様、ご登壇いただく九州大学の羽野先生に心よりお礼申し上げます。昨年、男女共同参画推進委員会からDEI 委員会へ名称を変更し、性別に限らない多様性に着目した活動を推進している。

本フォーラムのテーマである「マイノリティ起点イノベーションによるインクルーシブインフラの構築」について、従来の標準的な利用者を前提としたインフラ設計を見直す段階に来ている。



飯島玲子 DEI 委員長

障害の有無にかかわらず、誰にとっても安全で住みやすい社会を実現することは、技術者一人ひとりの設計、判断、倫理に深く関わる課題である。講演やディスカッションを通じて、各自の専門分野において何ができるのか、明日から何が変わられるのかという視点で考えていただければ幸いである。

(3)講演 「マイノリティ基点イノベーションによるインクルーシブインフラの構築へ」

羽野 暁 氏（九州大学 芸術工学研究院 未来共生デザイン部門 准教授）

講演者プロフィール

2002 年、九州大学大学院修了。(株)建設技術研究所、第一工業大学講師、九州大学キャンパスライフ・健康支援センター特任准教授などを経て、2025 年より九州大学 芸術工学研究院 未来共生デザイン部門 准教授を務める。専門はデザイン学。公共空間のインクルージョンを進める九州大学らくちんラボを主宰。主な作品に「やまだばし思い出テラス」（土木学会デザイン賞、キッズデザイン賞）。主な編著に「インフラ再考－解像度を上げて出会うインクルーシブな事例」。博士（工学）。



羽野暁氏（講師）

1. 障害の社会モデルと当事者共創

従来の障害の「個人モデル（医学モデル）」では、障害を個人の特性として捉え、その克服を本人に求めてきた。一方、「社会モデル」では、社会や環境が障壁を生み出していると考え。社会モデルの議論とあわせて、国際的には、物理的・制度的・情報・心理的という「4つのバリア」が示されており、インフラにはそれらを包括的に解消する役割がある。

また、「Nothing about us without us（私たちのことを、私たち抜きに決めないで）」という考え方が。単なる当事者参加ではなく、当事者が主体的・創造的に関わる「当事者共創」が重要になる。

2. マイノリティ基点によるインフラデザインの実践

九州大学らくちんラボや地域との連携による実践事例を紹介する。山田橋撤去に伴う「オープンスペース」整備では、発達障害のある児童の意見を契機として「やまだばし思い出テラス」を整備し、橋の記憶を継承する場を創出した。その結果、児童は橋の解体に際しても安心感を得ることができ、現在も「自分の場所」と感じているなど、Belonging（所属感・帰属意識）の形成につながった。

また、伊都キャンパスでは、車椅子利用者と視覚障害者双方のニーズを満たす「歩車道境界ブロック」の開発に関わった。物理的課題だけでなく利用者間の心理的対立の緩和にも寄与したと感じた。さらに、「ドライブスルー型駐車場」「木製バリアフリー歩道」「色覚多様性に配慮した公共サイン」など、多様なマイノリティの視点を基点としたインフラの実装にも取り組んできた。特に公共サインでは、多数派である「3色覚」ではなく「2色覚」を基点に設計することで、結果として誰にとっても分かりやすいデザインが実現でき、また当事者の特性が価値として認められ、設計に反映されていく経験が、当事者自身のエンパワメントにもつながっていると感じた。

3. インクルーシブインフラの構築へ

従来の公共インフラが想定してきた「ミスターアベレージ」は、健康な成人男性を前提とした限定的な利用者像であり、多様な人々にとっては障壁になり得る。そのため、高齢者、子ども、障害者などのリードユーザーとの共創を通じて、インフラの新たな価値を創出することが重要。

バリアフリーが障壁の除去、ユニバーサルデザインが誰もが利用しやすい環境づくりを目指す考え方であるのに対し、インクルージョンはマイノリティを基点としてイノベーションを生み出す考え方である。インクルーシブインフラとは「幅広い社会的マイノリティに配慮した公共事業」であり、当事者共創を通じてエンパワメントやビロギングを育みながら、すべての人のウェルビーイング向上につながる社会基盤を実現するものである。インフラを社会包摂の観点から捉え直していくことがこれから非常に重要になってくる。

(4) 質疑応答

現在、どのような研究・実践に取り組まれているのか、また山田橋のプロジェクトの先にどのような地域や社会像を見据えているのか、という質問があった。

羽野講師より、現在は引き続きインクルーシブなインフラを軸に研究と実践を進めている。山田橋の経験から、インフラは「つくって終わり」ではなく、使われ方や関わり、さらにはプロセスまで含めて設計することが重要だと感じた。特に、これまで十分に考慮されてこなかった多様な人々と共に考えることで、新しい価値が生まれると考えている。今後は、こうした共創を広げながら、インクルーシブな考え方を社会に実装していきたい。といった回答をいただいた。

(5) ディスカッション

講演内容を踏まえたグループディスカッションを通じて、「当事者共創」や「障害は社会により生じるものとする考え方」の重要性が共通認識として整理された。

- 「マイノリティ視点の重要性」や「物理面に加え心理・社会面を含めたインクルージョン」「4つのバリア」「社会モデルの理解」といった点が強く印象に残った
- 今後の取り組みとして、「当事者の意見を取り入れた共創の実践」や「業務・設計・教育への応用」、「情報発信や参加しやすい環境づくり」など、具体的な行動につなげていきたい。
- 「トイレ利用に関するセンシティブな課題」や「利害が対立する場合の調整(コンフリクト)」、「声を上げにくい人をどのように巻き込むか」といった課題がある。多様なステークホルダーを巻き込みながら解決していく必要がある。



長さやか 委員（司会）

(6) 羽野講師コメント

- 具体的な実装の話として受け取っていただけたことを、嬉しく思う。インフラが物理的なものととどまらない点も伝わり、ありがたく感じている。
- 抽象的になりがちなインクルージョンも、インフラを通じて「見える化」できると考えている。今後は、そのつくり方自体をよりインクルーシブに深めていきたい。
- 技術者にとって、人への配慮や関わり方は不可欠であり、DEIに限らず基礎的な素養として育んでいくべきものだと考えている。

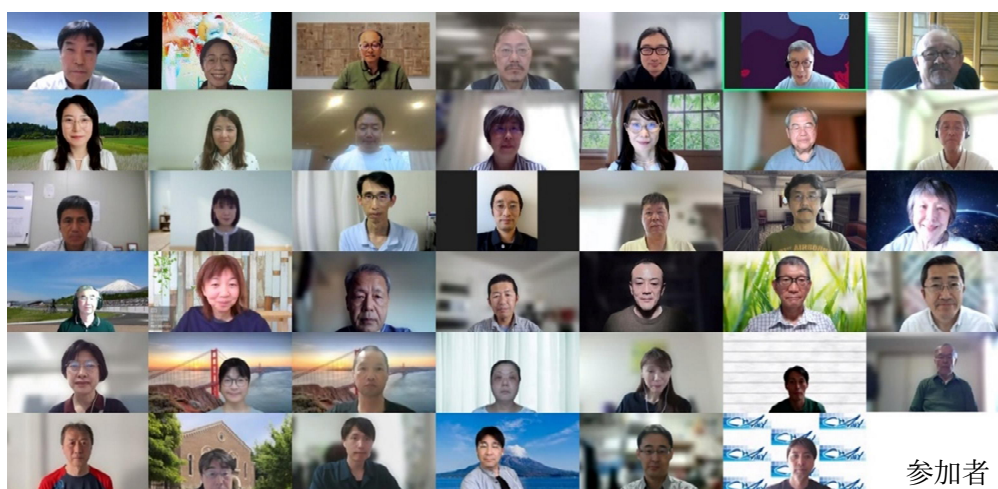
(7)閉会挨拶 日本技術士会 理事・DEI 委員会 副委員長 池田 紀子
羽野先生には、インクルーシブインフラで私たちがこれから目指すべき DEI の姿や現場での具体的な取り組みについて大変示唆に富むお話をいただいた。

講演を通じて、「障害」は個人の心身機能の制限のみではなく、社会に存在するバリアによって生じるという社会モデルの視点や、当事者共創、ビロギングの重要性について理解を深める機会となった。

また、DEI は単なる理念にとどまらず、組織や社会をより強く、しなやかにする基盤であり、参加者一人ひとりが本フォーラムで得た学びを各自の立場で行動に移すことが、今後の実践につながる。技術士会においても、透明性のあるルール作り、一貫性のある運用、継続的なモニタリングを通じて、DEI の実践と技術士会のさらなる発展に寄与をお願いし、ここで皆様と共有した思いを、今後の実践につなげて参りたい。



池田紀子
理事・副委員長



参加者

(8)アンケート要約

全体として、内容面・運営面ともに概ね高い評価を得た。特に満足の理由として、「DEI への理解が深まった」「具体事例が参考になった」など、講演内容に関する評価が約 4 割を占めた。講演で印象に残った点としては、「当事者共創という言葉を知った」「障害は人ではなくインフラの側にあるという気づきがあった」「山田橋の解体およびその 10 年後の話が心に残った」などのご意見が多く寄せられた。これらの結果から、具体事例を通じて DEI への理解が深まったことがうかがえた。

一方で、行動変容については、約 5 割が「意識向上」や「周囲への共有」にまで至っているものの、「具体的なアクション」にまで踏み出している層は約 15%にとどまっており、理解から実践への移行に課題が見られた。

今後の期待としては、「具体的な事例の紹介（約 30%）」および「実践方法の提示（約 20%）」が多く、「何をどのように実行するか」に対するニーズが高まった。加えて、フォーラムの継続開催を望む声も約 2 割を占め、一定の評価と今後への期待が確認された。

参加者は、インフラ系分野が約 37%、男性が約 67%、50 歳以上が約 65%を占め、実務経験を有するベテラン層が中心となった。また、約 6 割が本フォーラムの内容を SNS で発信することに前向きな回答で、外部への情報発信および波及効果が期待された。

【記録作成】

寄口孝行・小林裕典・林克彦・長さやか・北浦直子